Osaka University Knowledge Archive

Title	<書評>並木誠士・鄭于澤編『韓国の美術・日本の美術』
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 136-138
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52826
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

並木誠士・鄭于澤編『韓国の美術・日本の美術』昭和堂　2002年

渡辺　眞／京都市立芸術大学

特徴と概要

本書の趣旨については「はじめに」において，

> 私たちは，美術というジャンルでの韓国と日本の関係を見てみようと思い，この本を企画しました。

と語られ，特徴について次のように説明されている。

> この本の特徴は，つぎの3点にあります。その特徴とは，第1に，日本美術との比較を通して韓国美術を「知る」こと，第2に，内容に関しては専門性を重視するため，日本美術は日本の研究者が，韓国美術は韓国の研究者が執筆していること，そして第3に，韓国の「美術ガイド」として利用できるように，美術館・博物館・史蹟などの最新の情報を盛り込むこと，です。

それぞれの通史を合冊するのではなく，第Ⅰ章では，「作品を比べてみよう」という章題の下，日韓の作品を対にして23組を選定し，第Ⅱ章では「キーワードで比べてみよう」ということで25項目を設定し，執筆者が比較してみせるのではなく，両国の作例と解説を対置し，比較は読者にゆだねるといった，ユニークで意欲的な編集となっている。

選定された作例対や25の項目（キーワード）について少し紹介しておこう。第Ⅰ章では，ソウルの澗松美術館に所蔵されている三国時代の［三尊仏像］と法隆寺蔵の飛鳥時代の［釈迦三尊像］という作例対に始まり，「観音菩薩像」「半跏思惟像」「薬師如来像」など仏像彫刻関係が10対，［観経十六観変相図］と［当麻曼荼羅］の対に始まり，「観音図」や「古墳壁画」で対置し，また［美人図］と［見返り美人図］の対など，絵画関係が8対，その他梵鐘や漆器，仮面，茶碗など工芸関係が5対選定されている。

第Ⅱ章では，韓国では三国時代の副葬品，日本では藤ノ木古墳出土の馬具を取り上げた「古墳の出土品」と題した項目に始まり，最も多いのが「肖像画」「吉祥図」「風俗画」「文人画」など絵画のジャンルにかかわる項目で，これに「画師制度」「絵画の形式」「西洋画の受容」などを加えれば，過半数以上が絵画関係である。彫刻や工芸に関するものはほとんどなく，「城と宮殿」「寺院建築」「庭園」など建築，造園にかかわるもの，「映像芸術」「漫画」「近代美術」など近代以降にかかわるもの，その他「絵画と文学」「芸術家とパトロン」などである。

「韓国の美術に親しむ入門書的な性格」と編者たちは説明しているが，記述の内容は専門性に富み，むしろ今後の日韓両国の美術研究における相互理解の必要性を見据えた，若手研究者あるいは学生のための書と理解するにふさわしい。その意欲は，解説の記述の仕方にも窺える。定説化した内容としてではなく，今日的な研究状況や研究者の視点，関心を反映したものになっており，執筆者の個性を読み取れるところもあり，読んでいて楽しい。

浮上する論点

作例やキーワードを対にして解説するというスタイルは，単なるガイド書に終らせず，

両国に横たわる様々な問題点やそれぞれの特徴を浮かび上がらせ，本書を刺激に満ちたものにしている。いくつか取り出してみたい。両国の違いに関するもの，美術史における交差関係，日本の侵略や植民地政策にかかわるものなどである。

両国の違いに関して，最も興味深く思われたのが，18世紀の申潤福筆の［美人図］と17世紀末の菱川師宣筆の［見返り美人図］の対置である。韓国の解説者である陳準鉉は，

> 女人の静かな目つきとしっかりと結んだ唇ははにかみのようであるが，むしろ強烈な誘惑なのである。

と読み取り，他方，並木誠士会員は，

> 「見返り美人図」の「振り返る」という姿勢には，髪形や服装を見せたいという画家の意図が感じられる。たしかに，着物の美しさが，画家や鑑賞者の興味の対象といってもよいだろう。

と解説している。

申の［美人図］には，‘春意図’という言葉が使われており，韓国でも通用している言葉なのか，意を汲んだ日本語訳なのかわからないが，日本の‘春画’との関係も気になる。ともあれ興味を感じたのは，「誘惑」を感じるような素振りや表情が表現されている点である。日本の浮世絵などの美人図では，表情の表現そのものが少ない。観者に向けた表情や素振りと感じさせる例をあまり思い起こせない。春意図というのが，申個人の個性なのか，ジャンルといえるほど広がりをもっていたのかわからないが，両国の違いを強く感じた。

美術史上の奇妙な交差とは，

> 現在知られている高麗時代（918－1392）の仏画は150点ほどで，そのなかで100点あまりが日本に存在しており……。

という鄭于澤の記述によく表れているように，韓国美術史を綴るべき優品が日本の所蔵になっているという事実である。このことは，国際的にも珍しいことではないと思われるが，それにしても代表する作例として選定されているものの中に少なくないというのは特異なことであろう。通常は，自国にあって見慣れた優品の中から選ばれるのが自然である。日本の美術品として選定されているものの中に，海外に所蔵されている例はない。その上に奇妙なことは，日本の仏像として選定されている広隆寺の［半跏思惟像］が，解説によれば，結論が出ているとはいえないにせよ，制作地が朝鮮半島である可能性が強いようである，ということである。もしそうなら韓国美術史に位置づけられるべき作例である。しかし何の疑問もなく，日本の美術品として扱ってきた長い歴史があるからなのか。

また［大井戸茶碗　銘　喜佐衛門］は，制作地に基づいて韓国の作例とされているが，これに鑑賞的意義を見出したのは日本の茶道である。この作品は，韓国の陶芸史の上では，どのように位置づけられているのか，興味深い問題である。

3つ目は，両国の間に介在する侵略，植民地政策の影響の問題である。日本の執筆者にはこの問題に触れている例はないが，韓国の執筆者は明確に言及している。

> 1910年8月29日，韓国は日本の植民地となった。日本帝国主義は，韓国語はもちろん名前までも強制的に日本式に改名させるなど世界でも類例のない「植民地文化抹殺政策」をおこない，漫画をはじめ韓国の大衆文化は「暗黒のトンネル」に入り込んでしまった。

謝罪や補償をしたからといって加害者／被害者の関係が解消されるわけではなく，見続けるべき歴史的事実としてあり，必要なことは，可能な限り事実を明らかにしていく作業を続

けることであろう。この点，本書において，避けるよりも直面する編集方針が採られていることに敬意を表したい。

気になる点

最後に少し気になった点を指摘しておきたい。意欲的であるだけに問題も表面化しやすい面がある。最も気になったのが，両国の解説が，相互のかかわりに言及する例があまりなかった点である。1,000字強や1,800字強の字数枠での困難さを承知の上で言えば，読んでいて物足りなさを感じ，噛み合わない議論を聞いているような，何かすれ違いの印象をもったケースがあった。「映像芸術」の項では，韓国側の記述は，韓国状況の概要を把握できる内容であったのに対し，日本側のものは，森村康昌，森万里子，やなぎみわの活動の紹介に終始するといった具合で，特に論点のすれ違いが感じられた。

ともあれ，企画の新しさ故の問題点が残されたにせよ，そこから見えてくるものの多さからすれば，今後このような試みが他の分野でも行われることが期待される。